研　究　成　果　報　告　書

2026　年　2　月　10　日

1．所属・職・氏名　等

文学部国文学科　講師　阿部真也

2．研究課題（テーマ）名

日本探偵小説ジャンルの成立と変遷に関する研究

3．研究期間

2025 年 4 月～2026 年 3 月

4．利用した研究費の種類及び金額

若手教員研究促進交付金　100,000 円

5．研究の概要

本研究は日本の探偵小説ジャンルを動態として把握し、大正末から昭和初期にかけてジャンル概念そのものが形成されていく様相、およびその後に戦中・戦後の時代状況との相互作用の中でジャンルが変容していく様態を考究するものである。

個別の探偵小説作家が提唱する理論と実作の調査・分析を通して、ジャンルの全体像を闡明することを企図している。特に「健全 - 不健全」「本格派 - 変格派」「本格派 - 文学派」「本格派 - 社会派」等のジャンルにおける対立概念の発生と推移に着目して、ジャンルの有りようを共時的・通時的に浮かび上がらせることを目指す。

6．研究成果等

日本の探偵小説ジャンルが成立・変遷する様態を明らかにするべく、個別の探偵小説作家たちが理論を提唱する言説および実作の収集・整理ならびに検討を行った。戦前の探偵小説の牙城となった雑誌「新青年」ほか「探偵趣味」「ぷろふいる」、戦後の推理小説の牙城「宝石」等の探偵小説ジャンルに関わるメディアを渉猟しながら、特に戦後における「本格派 - 文学派」「本格派 - 社会派」等のジャンルにおける対立概念の発生と推移を共時的・通時的に明らかにすると共に、ジャンルの呼称が「探偵小説」から「推理小説」へと戦後に変化する過程も追跡した。

加えて、以上の探偵小説ジャンルの変容を踏まえた上で、戦前・戦中・戦後と創作を継続した探偵小説家・久生十蘭の個別の作品を分析して、十蘭作品の持つ独自性を明らかにすると同時に、ジャンル概念が転換する諸相を明らかにした。

第一には終戦直後に発表された『だいこん』についてＧＨＱによる検閲の影響も考慮しつつ考察を行い、戦後・占領下の探偵小説ジャンルが有する時代批評的な可能性を浮き彫りに

した。時代の転換の中でジャンルがナショナル・アイデンティティーを問題化する様相について論じた。

第二には昭和 20 年代後半に発表された『十字街』を通して、昭和 30 年代を席巻する社会派推理小説が成立する前夜の探偵小説ジャンルで「社会性」「政治性」が問題として浮上する様態を跡付けた。時代状況との呼応の中で、後の「社会派」の鍵語となる社会・政治の２語が前景化する過程を明らかにした。

以上、２作品についての研究成果を学術論文として発表予定である（下記、「実績」参照）。

７．研究の実績（論文・発表　等）

・「久生十蘭『十字街』論――「社会派」前夜の一諸相――」（「国文学論考」令 8・3）

・「久生十蘭『だいこん』論――メリーランド大学プランゲ文庫資料を通して」（『資料から読む探偵小説』勉誠社、令 8・7 予定）